カザロン・ド・シャ保存運動――中谷哲昇さん特別寄稿――＝連載（1）

|
2005年12月17日（土）

ブラジル、大サン・パウロ圏の東方に位置するモジ・ダス・クルーゼス市の郊外、コクエラ地区に日系移民大工が建てた製茶工場があり、地元の人達からカザロン・ド・シャ(お茶の館)と呼ばれている。独特の有機的な造形美を備えた、この国では珍しい木造建築で、鬼瓦に刻まれた年号から一九四二年に建てられたことが分っている。

一九八〇年代の初め、地元建築家を中心としてこの建物の保存の必要性が訴えられ、州政府文化局の調査するところとなり小冊「Casarao do Cha(カザロン・ド・シャ)」が刊行された。そして一九八二年州政府文化財保護機関より、更に一九八六年連邦政府文化財保護機関によって、州及び連邦政府の文化財に指定された。

この建物の歴史を見ると、もと長野県にあった片倉製糸の当時のオーナーが私費によって、北海道大学農学部出身の農学士揮旗深志をブラジルに派遣、一九二六年片倉合名会社の名前で百七十アルケールの農園（コクエラ農場）を購入した。揮旗深志は農業雑誌「農業のブラジル」の編集長なども務め、多くの記事を書き、農業技術の発展に貢献した。コクエラ農場では茶の他に種々の農産物が栽培されていたが、第二次世界大戦の折、茶の世界的生産地であったインドからヨーロッパへの航路が遮断され茶の値段が高騰、ブラジルの製茶業が好況に見舞われ、新工場として一九四二年に建てられたのがカザロン･ド･シャである。

この建物は棟梁・花岡一男に依頼して約1年がかりで建てられた桁行三五・五〇メートル、梁間一五・四〇メートルの製茶工場であり、第二次世界大戦終結後もしばらく盛んにお茶を製造していた。時代を経て工場の所有者が替わり、製茶は一九六八年頃まで続いたが、その後は農作業用倉庫として長く利用されていた。

私達がカザロン・ド・シャ保存運動を始めるに当たり、民間非営利団体として協会を設立、現在で九年を経過している。協会の設立に至るまでに、地元コクエラにある日本人会、モジ地域日本人会の連合体であるモジ文化協会、またサン・パウロ文化協会などに保存の協力を呼びかけた。しかし反応は鈍く、結局のところ協力は得られず独自の協会設立に踏み切った。協会設立当初、保存活動に対する地元日本人会の扱いは、半ば白眼視といったところであった。

二〇〇三年連邦政府文化省に申請していた三期に分けての復元工事プロジクトが昨年認可、今年七月第一期工事分が文化基金より交付され本格的復元工事が始った。また州政府より援助金が出て状況は好転しているものの、保存活動に参加する人が少なすぎることを痛感する。そして、この状況は何に由来するのか考え込まざるを得ない。協会責任者の組織力・指導力の不足と言うこともあろうが、どうもそれだけでは無さそうである。（つづく）

カザロン・ド・シャ保存運動――中谷哲昇さん特別寄稿――＝連載（２）＝大工「花岡一男」の自己主張＝仕上げに少々欠点があっても

|
2005年12月20日（火）

②大工・花岡一男の創造性

私がやきもの作りをしている関係上、ブラジル人より日本のやきものとブラジルのやきものはどう違うかとの質問をよく受ける。これについては次のように答えている。「日本の第一線で活躍している陶芸家の個展などを見ると、ほとんどの作品は技術的完成度が高く、この面で見るべきものが多い。これに較べブラジルでは創造性を重視して、仕上げに少々の欠点があってもほとんど気にしない傾向がある」と。

造形活動というのは誰しも模倣から始めるのだが、次第に進んで誰もやらないこと、ほかにない自分のものを創りだすことを心がける。それは取りも直さず自分は他と違うんだという自己主張に他ならない。

州政府文化局内CONDEPHAAT出版「Casarao do Cha」序文の中で「カザロン･ド･シャと称されるこの建物が指定文化財の候補として取り上げられた際、先ず我々に好奇心を抱かせた理由の第一は、農村の一角に生産を目的として建てられた建築物が、いかなる理由のもとにこのような華やかな外観を必要としたのであろうかと言うことであった」と述べられている。

いま、この建物が建造された過程を想像して見る。当時お茶生産が好況で金銭的に余裕があったこと。農場責任者であった揮旗深志が、当時としては珍しく文化に造詣があったこと。これらが作用して大工に自由な仕事の機会を提供できる余裕があったこと。そして大工・花岡一男に、自分の持つ技術を生かし、意中の建物を造りたいという強い気持ちがあったことなどの状況が想像される。

カザロン･ド･シャは日本に見られる国宝や重文のように金と時間をかけ時代の粋を集めたと言うような建築物ではない。勿論準備期間はあったろうが、約一年、収穫期から収穫期の間に完成しなければならないと言う条件の中で、本格的大工仕事の出来るのは彼ひとりという環境での作業であった。

カザロン・ド・シャは日本の伝統的な木造建築の技術を用い、建築用の木材は当時の農園内にあったユーカリ材を使用して原木の形をそのまま生かしている。基本構造は全て自然木の組込み式で作られている。ブラジルでは、この様な技術を用いた建築物は他に例が無い。

この建物は基本的には製茶工場で、いわば機能さえ発揮すれば良い建物であるのに、正面入口や事務室入口、階段の手摺りなど、随所に自然の枝ぶりをそのまま用いたデザインを工夫している。特に正面入口は一種独特の雰囲気を持つ有機的造形美となっている。このように観察すると、カザロン・ド・シャには、大工自身の持つ技術を発揮した遊びとも言える有機的造形をそなえた、花岡一男の創造・自己主張が見られる。

（つづく）

■カザロン・ド・シャ保存運動――中谷哲昇さん特別寄稿――＝連載（1）

カザロン・ド・シャ保存運動――中谷哲昇さん特別寄稿――＝連載（３）＝日本文化特有の自然観を加味＝自己主張なし得た好例

|
2005年12月22日（木）

③自己主張の文化

前回でカザロン・ド・シャには大工・花岡一男の自己主張とも言える職人としての強い思い入れが見られることは述べた。そこで文化における自己主張について日本の文化と外国の文化の違いを考えてみたい。

私が定義する文化とは、「人間の行動を支配する働きのなかで、生まれつき持っている本能的なものを除いた残りの、親から子へ、祖先から子孫へと学習により伝えられていく精神活動とその産物」である。この精神活動が個人の行動を規制し社会の秩序を作り出す場合、それは社会の文化規範となる。

この文化規範は社会の中に見られる原則で、お互いが知らず知らずの内に認識しあっている境界の曖昧なきまりのようなものである。

ここで、日本人の持つ文化規範、人間関係のあり方を基準として外国の文化を眺めると、ブラジルを含む新大陸とヨーロッパの文化、更に中国も含む大陸文化の特徴を大雑把に総括して「自己主張の文化」と規定できるだろう。これは、あくまで日本文化を基準としての話である。そして、この自己主張の文化は世界の大勢となっている。また自己主張の文化故に大勢となり得たのだろう。

日本人の持つ文化規範、人間関係のあり方から来る日本文化の持つ一側面を見ると、/相手の出方に合わせる/「察しが良い」「気が利く」など相手の気持ちや希望を先取りすることが普通に行われる/　基本的には相手と対立することを避け、できるだけ「NAO」と言わない/　自己と相手の隔たりを出来るだけ無くそうと努める/　相手の懐の中まで入っていく親密さが許容される/　自己を相手に投影し相手もこちらに同調することを期待する/個人の突出を抑え調和を図る/　相互依存、没個性となり易い/　集団内での自己の位置・立場を常に考慮する/などの特質を持つ人間関係がみられる。

このような特質を持つ文化は、外国へ出て、あるいは接触文化に向かって自らを主張する文化ではない。言わば「自己主張を嫌う文化」なのだ。日本の歴史を見れば、大陸の端に位置する島国という地理的条件のなかで、自らの文化を外に強く主張する必要もなかった。

一九〇八年よりこの方多くの日本人がブラジルに移民し、他の民族、そのほとんどは自己主張の文化を持つ民族に混ざって定着して行った。そこで日本人が自己の文化を残すには、日本人もまた自己主張しなければならない。これは「自己主張を嫌う文化」をどのように自己主張するかという大変奇妙な精神活動となる。日本の社会にある個人にも当然自己主張がある。しかしそのほとんどは日本社会の文化規範、人間関係のあり方の制約を受けたものである。

カザロン・ド・シャの場合、文化規範、人間関係のあり方との関連が希薄な造形という分野で、日本文化の持つ自然観も加味して、このブラジルで日系移民が自己主張を成し得た好例であろう。（つづく）

■カザロン・ド・シャ保存運動――中谷哲昇さん特別寄稿――＝連載（1）

■カザロン・ド・シャ保存運動――中谷哲昇さん特別寄稿――＝連載（２）＝大工「花岡一男」の自己主張＝仕上げに少々欠点があっても

カザロン・ド・シャ保存運動――中谷哲昇さん特別寄稿――＝連載（４）＝運動協力者が少ない現実＝「日本文化伝承の証」か

|
2005年12月23日（金）

④保存運動に協力者が少ないのは日本文化伝承の証
　今日まで、いろいろな日系人の個人や団体・組織に保存協力を呼びかけて来た。そんな時「地元の人はどうしているのか」「まず地元を動かさねば」などの返事が来る。日本政府の出先機関に協力を訴えると、やはり「地元の協力は無いのか」「サン・パウロ文化協会の会長でも頭を下げてくれば話は別だ」などとの返事であった。また「あの建物は地元社会に貢献したと言うものでない」との意見も耳にする。
　前述のような対応をみると、平均的日本人の価値判断はそういう基準なのかと改めて考え込んでしまう。日系人社会ではどれだけ多くの人が賛同するかによって、その重要性の判断を下すのだろうか。
　カザロン・ド・シャは多分に自己主張を伴った建物である。またそれ故に連邦政府の文化財に指定されたのである。ブラジルの日系人社会に「自己主張を嫌う」日本文化の持つ特質が色濃く伝承されているなら、自己主張を伴った建物の存在を受け入れ難いというのもうなずける。この様な見方をすれば「保存運動に協力者が少ないのは日本文化伝承の証」とも言える。
　ここに再度、前述の州政府文化局内CONDEPHAAT出版「Casarao do Cha」の序文を引用する。
　「日本人達が身につけてきた文化的要素を、ブラジルという新しい自然のなかにおいてどのような形でこれを再生しようとしたものか、また、どのような過程をへてその自然の中に定着していったのか。カザロン･ド･シャの価値を言及するに当たって、以上のように未だ研究され尽くしたとは言えない点について考察してみたい」
　ブラジル日系人社会のなかで、組織・団体の役員より「日本文化を普及したい」とか、「日本の精神を伝えたい」という言葉をいやというほど耳にする。しかし一例を挙げるなら「自己主張を嫌う文化」をどのように自己主張するのか正面から議論された話は、残念ながら一度も聞いたことが無い。前記序文に述べられている命題を解いていくには、まず日本文化とはどういう文化なのかを正確に把握することから始めなければならない。この作業なしに活動としての「日本文化の普及」「日本の精神の伝承」等はあり得ない。
　一九九八年国際交流基金の援助でこの建物の調査を行った上野邦一氏調査報告には次のように述べられている。「この建物の構造を観察するとき興味深い点は、水平梁にトラスを用い、小屋組みもトラスである。（トラスは当時日本では使われていない西欧に起源を持つ構造）。即ち、日本の伝統的な構造を基本とし、トラスを混用するという工夫が加わっている。これは大工・花岡一男が日本の伝統的な構造を熟知し且つ移民してから洋風建築の知識を得て出来たことである。この大工の考えはユニークであり、許されるならば、私は移民文化と呼びたい。ブラジルには様々な移民文化があろうが、カザロン・ド・シャは日本とブラジルに関る典型的な移民文化の建物である」
　出来るだけ多くの人にカザロン・ド・シャの現状を理解していただき、保存協力をお願いしたい。（おわり二〇〇五年十二月一日）

■カザロン・ド・シャ保存運動――中谷哲昇さん特別寄稿――＝連載（1）

■カザロン・ド・シャ保存運動――中谷哲昇さん特別寄稿――＝連載（２）＝大工「花岡一男」の自己主張＝仕上げに少々欠点があっても

■カザロン・ド・シャ保存運動――中谷哲昇さん特別寄稿――＝連載（３）＝日本文化特有の自然観を加味＝自己主張なし得た好例